わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

連232載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

検査の意味とその限界

「検査」の文字や言葉が、これほどメディアに登場したことはかつてなかったかもしれない。PCRという、従来からあった検査の一方法である専門用語を知らぬ人ももはやいないと思う。

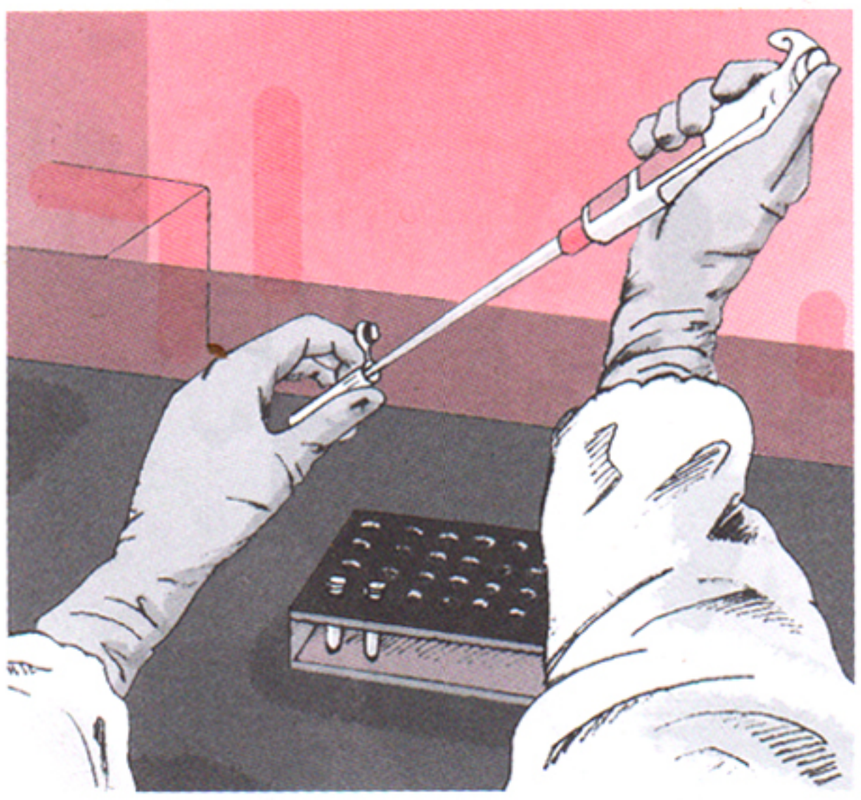
2019年以来、今日まで続くコロナ禍のためだ。PCRというのは、生物の遺伝情報であるDNAを複製し増幅させて検出する検査方法で、何も新型コロナの検査に特有な検査ではない。この技術によって検体（例えば、血液や尿や唾液など）に含まれる微量な病原体を見つけることが可能になり、色々な場面で活用されてきたものだ。

検査をする本来の意味を改めて考えてみた。

患者の立場からみれば、体調を崩す→その原因をはっきりさせたい→色々な検査を受ける→原因が判明する→原因を取り除く治療を受ける…。といった図式の中で検査は位置づけられる。検査の中には辛くて痛みを伴うものもあるが、それに耐えるのも、治りたいと願い、体調を回復させたいためである。

しかし、この検査というものは決して万能とはいえない。検査が患者の体のすべての情報を網羅できるわけではないからだ。結果的に、検査をしても病気の原因がわからない、ということはままある。あるいは、検査では異常がないのに、辛い症状が続く場合だってある。

つまり、検査というのはどこまでいっても完全なものはあり得ないということになる。ここを勘違いしてはいけない。



がんの検査では、必ず「見落とし」が存在する。がんであってもがんではないという結果を出したり、逆にがんでもないのにがんと診断することもある。かといって「見落とし」や「間違った結果」を容認しているわけではない。あやまちの率をなるべく低くするよう、検査や診断の精度を向上させる努力は日々おこなわれている。しかし、まったくゼロにするのは不可能といっていい。新型コロナの検査もしかり。残念だが、それが現在の医学の現状である。

ところが、昨今のメディアの報道を見ると、検査そのものに過大な期待を寄せる傾向がある。「陰性証明」という考え方がその一例で、完全に陰性であることを証明することはできないのに、それがないと店に入れなかったり旅行へ行けなかったり、そういった流れが出来てきている。検査の性質や限界を知っていればナンセンスとしかいいようがない。

あるいは、検査が陰性で無症状なのに濃厚接触者として位置づけ、外出を禁止するといった動きもある。これもまた、逆に検査の信頼性を無視したものだ。

検査キットが不足しているため、濃厚接触者を対象とし、検査をせずに問診等だけで感染したと判断する「みなし陽性」という考え方も示された。ここまで来ると、混乱の極みとしかいいようがない。

すべてがあやふやな中で、否応なく社会生活が閉ざされる事態である。発端のひとつは、やはり検査の本来の意義がわかっていないところにあるのだと思う。

検査が大切ではないといっているのではない。検査の意味や限界と、検査が示す情報をどうとらえていくのかを改めて考えれば、それほど慌てふためくことはなかろうに、と思えてならないのである。

イラスト・伊藤香澄